名所図会に描かれた庭園を伴う遊楽施設の空間利用に関する基礎考察

Basic Research on Space Use of Recreational Facilities with Gardens in the *Meisho-zue*

町田 香*

Kaori MACHIDA

Abstract : The purpose of this paper is to consider characteristics of space use of recreational facilities with gardens depicted in *Meisho-zue*. The facilities were mainly divided into two categories, such as restaurants and hot spring inns. The restaurants thrived around the Kyoto and Osaka areas, while the hot spring inns were represented by Hyogo, Nagano and Hakone areas. The restaurants were mainly enjoyed in the group, while the hot spring inns were mostly used by individuals. Nevertheless, the restaurants and hot spring inns shared a number of common characteristics in terms of recreation and space structures. Recreational facilities had major options, such as scenic appreciation, *igo*, *kemari*, *shamisen*, *cha-no-yu*. Hot spring inns also had lending libraries and outdoor recreational options in fields and rivers. These recreational options were complemented with excellent scenic locations, gardens with high buildings for scenic appreciation, ponds and springs for refreshing in the cool air, fields for playing *kemari* and tea ceremony rooms with the adjacent gardens for enjoying *cha-no-yu*. The recreational facilities with gardens were characterized by a space structure with elements not for personal pleasure, but to fulfill various kinds of pleasure considering many and unspecific customers.

Keywords: *Meisho-zue*, *Gardens*, *Restaurants*, *Hot spring inns*, *Space Uses*

キーワード：名所図会、庭園、料理屋、温泉旅館、空間利用

1. はじめに

江戸時代には庭園を描いた絵図が数多く制作された。特に大名庭園を描いたものは多く、庭園全体だけでなく、庭園内の見所となる景を絵巻にしたものなどバリエーションは豊富であった。しかし、絵図に庭園の様子は描かれているが、庭園を利用する人物の姿が描かれたものは数少ない。そのような中、寛政11年(1799)に刊行された秋里籬島の著した京都の名園案内記である『都林泉名勝図会』¹⁾には庭園を利用する人々の姿が生き生きと描かれている。

『都林泉名勝図会』に描かれた庭園の多くは、寺院の庭園であり井口²⁾や飛田³⁾が当時の状況やその後の変遷などをまとめている。寺院庭園のほかにも当時の名園として、寺院ながら料理屋として機能していた円山安養寺の塔頭群である六阿弥のほか、島原の揚屋である角屋など遊楽の施設が紹介されている点も、この書物の特徴である。

一方『都林泉名勝図会』だけではなく江戸時代には多くの名所図会が全国的に作成され、その中には庭園とその利用者が描かれているものが見られる。『都林泉名勝図会』は京都に限られているが、全国の名所図会類を概観すると、京都以外にも庭園の充実した遊楽施設が存在していることがわかる。

これら遊楽施設は私邸でも別荘でもなく、不特定多数の客を招き入れることを主体とした施設であることから、遊楽施設としての空間構成や利用の特徴があることが推測される。

よって本論では、名所図会に描かれた遊楽施設の空間利用の特徴を明らかにすることを目的とする。また、全国的に庭園を伴う遊楽施設が存在すると予想されるが、まず本論では基礎考察として名所図会といった視覚的に描かれた遊楽施設に限定した⁴⁾。

江戸時代の庭園といえば宮廷庭園や大名庭園など上層階級の回遊式庭園が代表的である。江戸時代にはこれら上層階級の庭園だけでなく、寺院の庭園や庭園文化が地域的にも階層的にも拡大したことから、庶民邸宅の坪庭なども作られ、時代的にも庭園文化

の興隆を極めた時代といえる。遊楽施設の庭園文化の特徴を提示することによって、江戸時代における庭園史に遊楽施設の庭園を位置付ける一助としたい。

2. 研究対象の定義

全国で作られた名所図会類は膨大な数にのぼる。ゆえに基礎研究である本論では名所図会の集大成である『日本名所風俗図会』(全18巻・別巻2)⁵⁾に所収されている計78種の主要な名所図会類に限定した⁶⁾。

また本論では遊楽を目的とした、あるいは利用目的に遊楽が含まれている集客施設を遊楽施設と定義する。例えば、温泉地の旅館は保養が目的であるが、遊楽が保養の役割をも兼ねていることからここでは遊楽施設とした。しかし、「遊楽」「遊興」「遊宴」など類義語は多い。一方、資料上では料理屋や旅館などの呼称は、時代や地域によっても統一されていない。例えば飲食を主とした遊宴が目的である施設の呼称は料理屋、借座敷、貸食店、貸食家また屋号など様々である。よって本論では先行研究の主題では「遊楽」「料理屋」の使用が多いことからこれらを参考にし、目的に遊楽が含まれている集客施設を「遊楽施設」、飲食を主とした遊宴が目的である施設を「料理屋」とする。

3. 名所図会に描かれた庭園を伴う遊楽施設の統計

本論で取り扱った名所図会に描かれた庭園を伴う遊楽施設を分類した結果、以下の表-1のようになった。

遊楽施設としては料理屋が29件と圧倒的に多数で温泉旅館の庭園が3件、花街が3件であった。また、料理屋は京都、大阪が中心で、愛知、江戸に若干描かれていた。『日本名所風俗図会』には全国の名所図会が収められていることから、遊楽施設が上方に集中していたことがわかる。また、江戸に関しては『守貞謄稿』などに多数江戸の料理屋があげられているが、名所図会には庭園が描かれている料理屋は数少なかった。

*国際日本文化研究センター研究部

表－１ 代表的な名所図会に描かれた庭園を伴う遊楽施設一覧

	場所	名称等	出典	施設		場所	名称等	出典	施設
1	京都	安養寺 勝興庵正阿弥	都林	料理屋	19	京都	弓屋	花洛	料理屋
2	京都	安養寺 長寿庵左阿弥	都林	料理屋	20	兵庫	多田莊 平野湯	摂津	温泉
3	京都	安養寺 花洛庵端の寮	都林	料理屋	21	大阪	浮瀬	摂津 浪華	料理屋
4	京都	安養寺 多福庵也阿弥	都林	料理屋	22	大阪	西照庵	浪華	料理屋
5	京都	安養寺 延寿庵連阿弥	都林	料理屋	23	大阪	福屋	浪華	料理屋
6	京都	安養寺 多蔵庵春阿弥	都林	料理屋	24	大阪	松屋	摂津	料理屋
7	京都	正法寺叔阿弥	都林	料理屋	25	大阪	住吉新家 伊丹屋	摂津	料理屋
8	京都	正法寺珠阿弥	都林	料理屋	26	大阪	住吉新家 三文字屋	摂津	料理屋
9	京都	正法寺巖阿弥	都林	料理屋	27	大阪	天下茶屋 周辺	摂津	料理屋
10	京都	双林寺長喜庵	都林	料理屋	28	大阪	一方楼	浪華	料理屋
11	京都	双林寺文阿弥	都林	料理屋	29	愛知	酔雪楼	尾所 尾陽	料理屋
12	京都	万春楼 (一力座敷)	花洛	料理屋	30	愛知	端の寮	尾所 尾陽	料理屋
13	京都	南禅寺前 湯豆腐店	都林	料理屋	31	東京	飛鳥橋周辺	江戸	料理屋
14	京都	島原京屋	都林	花街	32	東京	深川二軒茶屋	江戸	料理屋
15	京都	島原藤屋	都林	花街	33	東京	庵崎	江戸	料理屋
16	京都	島原角屋	都林	花街	34	長野	下浅間温泉	善光	温泉
17	京都	藤屋	花洛	料理屋	35	神奈川	箱根温泉	箱根	温泉
18	京都	井筒屋	花洛	料理屋					

都林：都林泉名勝図会 花洛：花洛名所図会 摂津：摂津名所図会 浪華：浪華の賑ひ 尾所：尾張名所図会 尾陽：尾張名勝図会 江戸：江戸名所図会 善光：善光寺道名所図会

京都島原の揚屋である角屋などは花街にあって特殊なので、今回は除外し料理屋と温泉旅館のみを扱うことにしたい。

よって以下、料理屋と温泉旅館に大別して空間利用を見ていく。

4. 料理屋の空間利用の特徴

表－１を見ると、京都の中でも東山の時宗寺院群一帯が料理屋の集まる地区であったことがわかる。図－１は『都林泉名勝図会』に描かれた、京都円山にある時宗の寺院、安養寺の塔頭の一つ多蔵庵春阿弥である。安養寺の六阿弥坊は貸座敷として繁盛しており、他に勝興庵正阿弥・長寿庵左阿弥・延寿庵連阿弥・多福庵也阿弥・花洛庵端の寮があった。これら六阿弥を含め円山の時宗寺院に関しては、出村らが寺院の地形・位置と特性に結びついた空

図－１ 安養寺多蔵庵春阿弥の遊楽と庭園

間構成、また貸席として開放された後の新たな文化を形成した場としての利用について論じている⁷⁾。京都円山の料理屋に関してはこれらの先行研究に助けを得ながら、図会に描かれた描写に注目し空間利用の内容について見ていきたい。

図－１に描かれた利用客の様子を見てみよう。まず右画面下方の建物の縁側には煙管を手を持った人物が庭園を眺めており、その左手の人物は庭園を指差している。縁側の二人から少し左方に目をずらすと二人の男性が囲碁があるいは将棋をしている様子が描かれている。そしてさらに邸内の奥では腕相撲が行われ賑わっている。上方の建物では宴会が行われており、飲食をする者の中に三味線を弾く芸妓らしき女性の姿が見える。

図－２は同じく『都林泉名勝図会』⁸⁾に描かれた六阿弥中唯一現存している長寿庵左阿弥の様子である。懸造の建物の縁側は外部に開け眺望に適しており、周辺の景色が見渡せる室内では、盃を交わす者、また三味線を弾く芸妓や部屋の奥には囲碁盤が見える。春阿弥、左阿弥の空間利用には飲食・宴会に加えて眺望の楽しみや囲碁・将棋といった盤上遊技、三味線などの管絃が共通項として見出せる。

図－２ 眺望に優れた左阿弥の建築

次に屋外空間を見てみよう。図－１の春阿弥の庭園には柔らかな流れと水を湛えた池が中央にあり、池には魚が泳いでいる。池の後部は大きな築山があり山頂には眺望施設である亭が描かれ２人の男性が庭園を見下ろしている。築山に方形の刈り込みが連なっている点も目を楽ませる要素であったろう。画中には一から十まで番号が記され池や橋、庭園建築などが命名されており、庭園内の十境まで定められていた。

元治元年（１８６４）に刊行された『花洛名勝図会』⁹⁾には安養寺六阿弥が下記のように説明されている。

当山の坊中勝興庵正阿弥、長寿庵左阿弥、花洛庵重阿弥又端の寮といふ。多福庵也阿弥、延寿庵連阿弥、多蔵庵源阿弥等、各書院より都下西野を一望して景致他なくいはんかたなし。又、庭中には石を畳むで飛泉を催し、池を鑿ては種魚を育ふ。緑樹芳草四時の美色を備へ、点茶の席蹴鞠の場を構へて、遊宴の設けたらざるなし。故に都下はもとより遠境の登客必ず此諸楼に遊興を催すも宜なり。実に洛陽観筵最大一の勝地といふべし。（下線筆者）

書院から京の西方が一望でき眺望に優れていること、庭園は石が畳まれ、滝が造られ、また魚の泳ぐ池があること、そして植栽が四季折々に美しいことに加え、庭園や眺望が優れていること、茶室、蹴鞠の場があることが記されている。

名所図会に描かれた諸々の遊楽施設を概観すると、眺望のための高層建築物が共通して存在しており、客らが遊楽施設に期待する第一の要望は「眺望」にあったといえる。安養寺、双林寺、正法寺に共通して見られるのは、二階ないしは三階建ての高層大書院建築であり、それらは周辺の眺望が見渡せるよう開放的なつくりになっている。人々が開放的な窓から外界を眺め、眼下の景色が映し出されている様子が共通して描かれており、料理屋の建築の特徴といえる。こういった大建築だけでなく、庭園内には眺望に適した楼閣風の庭園建築も描かれている。東山の遊興施設群は

図-3 四方吹き抜け・懸造の庭園建築¹⁰⁾

景色を眺めている。

京都東山の料理屋の多くは『都林泉名勝図会』に描かれており、利用客の様子が絵図で確認でき、描写と解説文から判断すると空間利用は概ね上の記述のように、宴会に対応できる大広間、眺望施設、庭（池庭の場合も多い）、茶室や亭、囲碁、三味線といった要素に集約されている。しかし、その他の名所図会に描かれた料理屋の描写では人物はほとんど小さなシルエットで描かれており、利用実態を詳らかにできないが、絵図と解説文からは飲食、宴会、庭園、眺望といった要素が概ね共通した空間利用であることがわかる。

一方、先の『花洛名勝図会』に記された安養寺六阿弥の「蹴鞠の場」を構えてという説明があったが、名所図会の料理屋には蹴鞠の場である懸も、蹴鞠をしている人々も絵図中に確認することはできない。しかし『花洛名勝図会』だけでなく『都名所図会』における安養寺六阿弥の解説には「・・蹴鞠の履の音涼しく・・」¹¹⁾と書かれており、また江戸の深川の料理屋でも茶室と鞠場があったとされ¹²⁾、蹴鞠が料理屋での遊楽の一つであったといえる。また『京都坊目誌』に六阿弥は「・・以上六坊は非俗非僧の者住持す。円山の勝地に依り高樓書院の設けあるを以て。四時観光人士の請ひに任せ。之を貸与せしが。遂に明和の頃酒樓と異なるなく。風流行楽の域と化す。或いは蹴鞠の場となり。或は詩歌俳句書画等雅会の席となれり。・・」¹³⁾とされ、ここでも鞠場であることが特記されている。また、「或は詩歌俳句書画等雅会の席となれり。・・」とあるように『都林泉名勝図会』に描かれた正阿弥では書展の様子が大々的に描かれている。名古屋の酔雪楼でも書画の雅会が行われており、料理屋の空間利用として詩歌や書画などの雅会の催しも一つの要素であったといえる¹⁴⁾。

以上、料理屋は①饗応・宴会とそれに対応する大広間②眺望とその為の亭や高樓③四季折々の風情が楽しめる庭園④茶湯とその為の茶室⑤歌舞・音曲⑥囲碁などの盤上遊技⑦蹴鞠⑧詩歌・俳諧・書画などの雅会といった空間利用が代表的であったと考えられる。

表-1 にみるように名所図会に描かれた料理屋の庭園は京都に次いで大阪が多く、また江戸にも数件事例が見られる。江戸と大阪の料理屋の庭園に関しては飛田の論考に詳しい¹⁵⁾。特に大阪の料理屋の庭園に関して飛田は地域ごとに分類し説明を行い、最後に大阪の料理屋庭園の特性をまとめている。飛田は年代的に料理屋は宝暦・明和期（1751-1772）に繁栄し、文化年間（1804-1818）に興隆したと推測している。先の京都円山の時宗寺院が料理屋として新たな文化の場を形成したのも江戸中期の明和年間頃と指摘されていることから¹⁶⁾、不特定多数の客のための遊楽施設としての庭園文化が江戸中期から発生することが見出される。しかし、円山の時宗寺院に関しては17世紀半ばに刊行された『洛陽名所集』などに

山崖に建てられていることから、部分的に懸造になっていることがほとんどであるが、図-3のように勝興庵正阿弥の庭園には泉水の上に四方が吹き抜けになっている珍しい懸造の庭園建築が描かれており、中には三人の男性が外の景色を眺めている。

は既に遊宴の施設として記されていることから、眺望や立地に優れた寺院庭園に雅客が訪れるに従い、江戸時代前期を通じて集客を目的とした利用に変化し、江戸中期には料理屋文化が形成されていったと考えられる。

5. 温泉旅館の空間利用の特徴

図-4 温泉旅館の遊楽と庭園の様子

名所図会に描かれた遊楽施設は料理屋の他に数件の温泉旅館が見られた。図-4は『善光寺道名所図会』¹⁷⁾に描かれた現在の長野県にあたる下浅間の温泉旅館の様子が描かれている。一階は座敷湯で湯船につかる人々と、脇の壁には衣類が掛けられている。隣の庭園に開けた座敷では裸の男性が二人庭園を眺めており、傍らにはお茶が置かれている。二階の座敷は障子もなく屋外に開かれており、高欄に寄りかかり外の景色を眺めながら男性が一人涼んでいる。室内には寝転がる男性と仲居らしき女性の姿、また囲碁盤が置かれていることがわかる。二階奥の座敷では料理を味わう男性と給仕の女性、そして料理屋同様ここでも三味線を弾く女性が傍らに描かれている。屋外に目を向けると建物の前には庭園があり、池に円月橋のような太鼓橋が架かり、円柱のように刈り込まれた植栽が所々にある。

図-5は現在の兵庫県川西市にあたる摂津の多田荘平野湯の旅館を描いたものである¹⁸⁾。細かく空間利用を見てみよう。まず一階の座敷では男女が五人で何か楽しげに話をしており、縁側にはやはり三味線が置かれている。二階座敷に目を移すと、縁側で外の景色を眺めながら涼んでいる男性二人、部屋の奥では寝転んで本を読む者と男性三人で囲碁盤を囲んでいる様子が描かれている。料理屋と同様温泉旅館でも囲碁・将棋、三味線が共通した遊楽であったことがうかがえる。屋外空間をみると屋敷の外には池を湛

図-5 料理屋と共通した遊楽が描かれている温泉旅館の様子

えた庭園の一部が描かれ、小さな露地を伴う茶室では点茶が行われ、また鞠垣の中で蹴鞠を楽しむ人々の姿が描かれている。

「各書院より都下西野を一望して景致他なくいはんかたなし。又、庭中には石を畳むで飛泉を催し、池を鑿ては種魚を育ふ。緑樹芳草四時の美色を備へ、点茶の席蹴鞠の場を構へて、遊宴の設けたらざるなし。」と、眺望、池・瀧、植栽、茶室、鞠場が先の『花洛名所図会』に記された京都の安養寺六阿弥の空間構成要素であったが、多田荘平野温泉の旅館も同様に、池のある庭園、眺望の楽しみ、茶室、蹴鞠の庭が描かれており、料理屋と温泉旅館の空間構成の共通性が見出せる。ゆえに料理屋の遊楽として文章には記述されるが、絵画には描かれていなかった蹴鞠の様子も、多田温泉旅館にみるように庭園の仮設物である鞠垣の中で蹴鞠をしていたことが推測される。

一方、文化8年(1825)に刊行された『箱根七湯集』¹⁹⁾には箱根宮の下温泉に関する記述の中に「この宮の下は宮根の山の半腹にありて、土地高く打ちひらけたる所なり。・・・湯宿奇麗にして、上段にあげ畳をまうけ、書院・入側・床・ちがひ棚、物として美をつくし、風流をきはむ。・・・浴衣ひとつに鞠蹴あれば、袖なし羽織打ちかさね、囲碁の妙手案ずる有り。・・・」とあり、箱根宮の下温泉での遊楽の中で囲碁・蹴鞠のみが特記されている。このことから料理屋と同様に囲碁と蹴鞠が遊楽の代表であったことがわかる。さらに文政13年(1830)刊行の『熱海温泉図彙』²⁰⁾には「遊楽」(旅客逗留中のたのしみをするす)という項の中に熱海温泉での遊楽が事細かに記されており、温泉での遊楽を知る手掛かりとなる。

▲碁盤・象棋(常に客やにあり)。▲琴・三味せん・鼓・大鼓。▲茶のゆ道具(もとめに応じてこれを借す)。▲借本。▲楊弓みせ。春 山々の花見。▲蕨とり。▲青踏・汐干狩。夏 蛭狩。▲浜辺の納涼。磯遊び。秋 鮎つり(糸川・和田川・初川)▲紅葉狩。▲鹿聞。虫聞(暖地なればむし多し。早くいでて遅くをはる。客屋の庭にも、松虫・すすむし終夜すだく)。▲茸狩(初だけ・松たけ、山々に多し)。▲雉子取。▲小鳥狩。冬千鳥。▲雪見。▲猪打

▲魚漁はこの地第一の遊楽なり。もとより四季にかかはらず。▲鯛網(時としては一度に大小の鯛、数百枚を得る)。

▲地引網。▲松魚釣。▲長縄。▲石決明取。▲磯の貝ひろひ。ここでも、最初に囲碁・将棋、三味線、茶の湯などがあげられており、これらは料理屋、温泉旅館に共通した遊楽であったことがわかる。そして囲碁・将棋盤は常に部屋に備えられていて、茶の湯の道具は旅館から借りて楽しむものであった。次に貸し本とあるが、温泉旅館の絵図には寝転びながら貸本を読んでいる場面が多く、先の多田温泉旅館の二階で寝転びながら男性が読んでいた本も貸本だった可能性が高い。この貸本は料理屋の描写にはないので温泉旅館での遊楽の特質といえる。この他にも温泉旅館の絵図には楊弓屋や軍書講釈なども描かれている事例があり、温泉地での保養を兼ねた遊楽であった。

名所図会に描かれた温泉旅館は多数あるが庭園を伴うものは僅かであった。熱海温泉の遊楽一覧にあるように、潮干狩りや紅葉狩、茸狩など庭園ではなく周囲の山や海といった自然そのものを満喫する遊楽が多い点が特徴的である。

6. おわりに

本論では、代表的な名所図会に描かれた庭園を伴う遊楽施設の空間利用の特徴を考察した。描かれた遊楽施設は大きく料理屋と温泉旅館に大別され、料理屋は京都と大阪を中心に多く描かれ、温泉旅館は兵庫、長野、神奈川等に若干の事例が見られた。料理屋は団体でも楽しむ施設で、温泉旅館はむしろ個人的な利用であ

るが、遊楽や空間構成には共通点が多かった。

料理屋での遊楽としては、①饗応・宴会とそれに対応する大広間②眺望とその為の亭や高樓③四季折々の風情が楽しめる庭園・池庭④茶湯とその為の茶室と露地⑤三味線をはじめとする歌舞・音曲⑥囲碁などの盤上遊技⑦蹴鞠⑧詩歌・俳諧・書画など雅会が主流であり、温泉旅館は保養のための施設であることから料理屋のような宴会を主目的としないが、眺望の楽しみや、茶の湯、管絃、蹴鞠など料理屋の遊楽との共通項も多く見られた。また温泉旅館では囲碁や茶の湯を楽しむための道具の貸し出しシステムが整っており、貸本や旅館外の野山や川遊び等の庭園外の利用も特徴である。私的ではなく、不特定多数の多様な客の楽しみを満たす要素が随所に凝縮された空間構成であることが、庭園を伴う遊楽施設の特徴といえる。

補注及び引用文献

- 1) 本論では、臨川書店(1976):新修京都叢書、第9巻:都林泉名称図会を使用した。
- 2) 井口海仙(1965):都林泉名勝図会考:淡交、淡交社、33編にのぼる。
- 3) 飛田範夫(1983):都林泉名勝図会(巻1)の庭園:造園雑誌(46)5
- 4) 名所図会の解説文のみに記された庭園を伴う遊楽施設も存在するが今回は除外した。また、庭園が描かれていない遊楽施設も存在するが、本論は庭園の利用状況を調べるのが目的なので、これらも研究対象から除外した。
- 5) 角川書店(1979):日本名所風俗図会、全18巻別2
- 6) 合わせて甲斐名所図会、江都名所図会、鹿島名所図会、絵本城崎土産など可能な限り調査したが現時点では、『日本名所風俗図会』以外に庭園を伴う遊楽施設は見つかっていない。
- 7) 出村嘉史ら(2001):近世の京都円山時宗寺院における空間構成に関する研究:土木計画学研究・論文集18(2)、387-394
- 8) 同1)、240-241
- 9) 角川書店(1979):日本名所風俗図会、7京都の巻I:花洛名所図会
- 10) 同1)、242-243
- 11) 角川書店(1979):日本名所風俗図会、7京都の巻II:都名所図会
- 12) 飛田範夫(2009):江戸の庭園:京都大学学術出版会、214
- 13) 臨川書店(1976):新修京都叢書、第20巻、京都坊目誌、441
- 14) 角川書店(1983):日本名所風俗図会、6・東海の巻:尾張名所図会、81に、「酔雪楼(富士見の辺にあり。東郊にのぞめる亭にして、風景たぐひなき借座敷なり。書画会等の雅筵を張るによろしく、遊人常にたゆる事なし)」とある。
- 15) 飛田範夫(2003):郊外の料理屋の庭園:グリーン・エージ(30)8、日本緑化センター、32-35、また大阪の名所図会については、宗政五十緒編(2000):大阪の名所図会を読む:東京堂出版に詳しい。
- 16) 同7)
- 角川書店(1983):日本名所風俗図会、5東山・東海の巻:善光寺道名所図会
- 17) 同15)
- 18) 角川書店(1980):日本名所風俗図会、2関東の巻:箱根七湯集
- 19) 角川書店(1983):日本名所風俗図会、5東山・東海の巻:熱海温泉図彙